仙台市北部ニュータウンにおけるガ行子音の変異と変化
―言語の使用と意識に関する社会言語学的研究―

奥村　晶子

要旨

本稿は日本国内では未だ研究の進められていないニュータウンを調査地とし、異なる方言の接触がガ行子音の鼻音変異形から破裂音変異形への変化に与える影響を探ったものである。データは産出（production）と認識（perception）の二種類を用いて、変異形が持つ社会的意味の解明を試みた。産出データに現れた世代差からは、鼻音から破裂音への変化が明らかとなり、二世の発話では破裂音へのフォーカシングが起きていることが示された。また、スタイル差より一世は鼻音を、二世は破裂音を標準的変異形だと認識していることが示唆された。さらにインタビューの結果からは、一世・二世ともに変異形の違いを意識していないという回答が多数派だったものの、二世は鼻音に対し「田舎っぽい」という評価を抱いていることも判明した。一方、認識タスクの結果からは、発話内で使用される変異形が鼻音か破裂音かという違いのみからは、被験者が発話から受ける印象や発話への評価に差が生じにくいということが明らかとなった。

キーワード：言語変化，方言接触，ガ行子音，ニュータウン，産出と認識

1. はじめに

日本語におけるガ行子音の変異とその通時的変化は、日本語の音韻学的変異としてよく知られたものである。ガ行子音の通時的変化に焦点を当てた研究も、東京を調査地としたものをはじめ、いくつかの地域で行われてきた。しかしながら、これまでの研究対象は生え抜き話者が中心であった。よって本稿では、先住者のいない土地に日本各地から移り住んできた住民から構成されるニュータウンを調査地とし、異なる方言の接触を経たコミュニティにおけるガ行子音の変異と変化を探ることを目的としている。日本国内におけるニュータウン研究は未だに限定的と言え、管見の限り、ガ行子音の変異に関しては調査が行われていない。さらに、これまでのガ行子音の研究においては、発話データのスタイル差やアンケートによる自己申告に基づき変異形の持つ社会的意味を解明しようと試みてきた。本稿では、発話データやインタビューに加え、話者が発話を聞いて評価するという認識タスクも取り入れ、異なる手法で得られたデータから考察を行う

ことで、当該コミュニティのガ行子音の変化の様相を捉えようと試みた。以下、第 2 章でガ行子音の変異と調査対象コミュニティの概観を述べ、第 3 章で本調査で使用した調査方法の詳細を挙げる。第 4 章では産出データ、及び認識データそれぞれから得られた結果を示し考察を加え、第 5 章で結論を述べる。

2. 背景

2.1 ガ行子音の変異と変化

現代日本語の語中におけるガ行子音/ɡ/は、変種によって軟口蓋破裂音[ɡ]単独、または軟口蓋鼻音[ŋ]との併用で発音される傾向にあるが、伝統的に鼻音が優勢に使われる方言地域（例：東北地方や関東地方の大部分（国立国語研究所 1966, 第 1 図・第 2 図））においても、鼻音から破裂音への変化が報告がされている。例えば、金田一（1942）が 1941 年に行った調査では、東京生え抜きの生徒 70 人に単語リストを使って調査した結果、鼻音を全く用いない話者が 3 割、全てを鼻音で発音する話者が 3 割、その他は鼻音と破裂音を混用する話者であったこと、そして山の手地域から西の広い地域において鼻音を使わない生徒がいたことを指摘している。また、言語学的要因として、漢語、「ギ」と「グ」の音節、第 3 音節では破裂音で発音される傾向にあると述べた（1942: 189）。さらに、鼻音が主に「古い伝統」（金田一 1942: 169）を持ち、「帝都で標準的な音韻」（金田一 1942: 169）であることから「標準音」として認められており、小学校教育でも指導がなされ、アナウンサーにも要求されたと記述している。

井上（1968）は自身の調査に加え、金田一の調査をはじめ日本各地で観察された鼻音から破裂音への変化を概観し、その共通要因を探った結果、言語内的要因とともに、移住や婚姻によって異なる体系（語中の鼻音を持つ方言と持たない方言）が接触することで破裂音への変化が浸透すると論じている。

1940 年代の金田一の調査以来報告されてきた東京方言おける変化も、1980 年代後半に中野区で東京生え抜きを対象に行った永田（1987）の研究によると、ガ行鼻音は「ほとんど消失したと言っても誤りではない」（1987: 66）ほど変化の完了に近づいていたという。永田（1987）は、なぞなぞ形式の発話と単語の読み上げという二つのデータを収集・比較し、話者の年齢と言語学的諸要因を考察した。その結果、和語・漢語・外来語の順に鼻音が頻用されることを統計分析から明らかにし、使用頻度から格助詞の「ガ」と直前が撥音/N/である音韻環境において鼻音の使用率が高く、複合語中では破裂音になる傾向を示した（1987: 69-70）。また、なぞなぞ形式の発話において鼻音の使用率がより高いという結果から鼻音に規範意識がないと結論づけている。さらに、変異形の使い分けに関して話者に尋ねたところ、鼻音と破裂音の差自体を意識していない話者が多いことも指摘している。

それと同時期（1986 年）・同地域内（東京）で行われた Hibiya（1988, 1995）の調査で

は、単語リスト、文章読み上げ、インタビュー、インタビュー外のくだけた発話という四つの異なる種類のデータを収集し、言語学的要因と社会的要因を調査した。その結果、まず年齢が低いほど破裂音を多用することを指摘した。さらに根津地区（「中産・上流階層の居住地である」山の手と「下流中産階層と労働者階層の住む」下町（1988: 13）の接触する地区）における変化の分析を通じ、山の手出身者がその変化を率いており、山の手出身者以外の話者であっても山の手地域との接触が多い話者は破裂音を使う傾向にあることを指摘した。また、単語リスト・文章読み上げ・インタビュー・くだけた発話の順に高い割合で破裂音を使う傾向があることから、話者が発話に向ける注意の度合いの差が言語変異に関係していることも明らかにしている。さらに、言語学的要因に関しては以下のことを実証した。①和語・漢語・外来語の順に鼻音が使われやすい（1988: 62, 75）、②複合語の後部要素語頭に現れる/g/は単一語中や拘束部形態素の頭に現れるものよりも破裂音になりやすい（1988: 63, 75）、③連濁によって有声化したカ行子音の場合は破裂音で発音されやすい（1988: 64）、④アクセントのピッチが高い場合は破裂音になりやすい（1988: 65, 77）、⑤直前の音韻は撥音の場合鼻音になりやすく、高母音の場合破裂音になりやすい（1988: 69）、⑥格助詞の「ガ」は破裂音になりにくい（1988: 81）。

東京以外の地域におけるガ行子音の研究に関しては、1980 年代半ばに札幌と富良野で国立国語研究所が行った調査を南部・朝日・相澤（2014）が統計的に再分析したものが挙げられる。その結果、どの年齢層においても短文読み上げと比較して語彙リストの読み上げにおいて破裂音の発生率が一貫して高いことから、両地域において破裂音が「規範」、「威信のある形式」とみなされていると論じている。また、言語学的要因では、①/g/が助詞の「ガ」に用いられる場合と、②先行する拍に鼻音がある場合、鼻音で発音されやすいことが明らかにされた（2014: 179）。

本稿の調査地と同じ仙台市の中でも都市部における調査が大橋（2000）によって行われている。語中ガ行子音の鼻音化は、歴史的に東北方言の大きな特徴の一つとされてきた（大橋 2001: 106）が、仙台生え抜き及び在外歴の少ない者（小林 2000: 5）であっても鼻音使用の減少傾向が報告された。大橋（2000）は、各年齢層より単語リストの読み上げ調査を行った結果、①複合語よりも単一語の場合、②連濁の場合、③前の音が撥音の場合に鼻音率が高いことを明らかにした（2000: 12, 16）。また年齢が低くなるにつれて鼻音率は減少するものの、高年層と中年層の鼻音保持率は依然として東京より遥かに高いことを示した。若年層から少年層への減少率はそれほど高くはなく、変化は横這い状態であることが特徴として述べられている。さらに大橋（2001）は東北のいくつかの調査地におけるガ行子音の変化を比較し、最も規模の大きな調査地である仙台においてはその「都市」という性質が破裂音への変化を進行させているのではないかと考察している。

本稿は、同じ仙台市内ではあるものの、異なる方言話者が移り住んで形成された郊外

のニュータウンを調査地としている点において、大橋（2000）の調査とは異なる視点を持つ。つまり、仙台・東京はともに生え抜きと新参者が入り混じる都市部であるにも関わらず、先行研究では生え抜き話者の方言変容に絞った調査考察であったと言える。それに対し、本稿が扱うニュータウンは先住者不在の、つまりその地に根差した既存の言語使用が固定されていない地域であり、井上（1968）が指摘する「移住によってもたらされる接触」の効果を最大限に生かした考察ができる地域であると言える。日本国内ではニュータウンにおける研究（朝日 2008）は未だ限られているが、海外においては世界各地で研究が進んでいる（Kerswill & Williams 2002, Kerswill 2013）。これまで社会言語学の領域では、異なる変種が接触した結果、どのような言語学的過程を経て「コイネー」が誕生するのかを解明する研究が重ねられてきた（Trudgill 1986）。その過程の一つであるフォーカシング（focusing）は接触環境で言語獲得をした世代において一つの変異形へ使用が集中していくこと指し、イギリスのニュータウンの二世の発話でもフォーカシングが起きたことが報告されている（Kerswill 2013: 527-531）。よって、本稿では人口の流動性の高い仙台都市部に住む生え抜き話者と、郊外のニュータウンへ移り住んだ一世とニュータウン育ちの二世を比較し、ガ行子音の変異と変化の諸相の違いを明らかにする。

また、大橋（2000）、永田（1987）、南部・朝日・相澤（2014）では話者による変異形への評価や意味付けが十分に明らかにされていないため、本稿では異なる時代に各地で各変異形が持っていたとされる様々な社会的意味を参考にしつつ、当該ニュータウン一世と二世が鼻音と破裂音へどのような認識や評価を抱いているのかを探る。つまり、戦前の東京においては、鼻音は帝都の標準語としての地位を持ち学校教育やアナウンサー養成の場でも指導されていた威信のある変異形であり、破裂音は戦後、より社会階級が高い山の手の話者によって採用・拡散されていったことが先行研究によって指摘されているが、伝統的な地域方言として鼻音が使用されてきた仙台ではそれぞれが持つ社会的意味はどのようなものなのか（「田舎っぽい」のか、「愛着がある」のかなど）を、産出と認識データを駆使して解明を試みる。また、言語学的要因として、語彙層（和語・漢語・外来語）、直前の音韻環境（母音や撥音）、格助詞の「ガ」、連濁、語・形態素境界の有無というそれぞれの言語環境が鼻音率に与える影響を探る。

2.2 対象コミュニティ

調査を行ったコミュニティは、仙台市北部にあるニュータウンで、調査時には35周年を迎えた住宅地である。主に以下3点が本ニュータウンの特徴と考えられる。まず東北地方でも最大級といわれるその規模から幼稚園、学校（小中学校・高校）やスーパー、レストラン、運動施設などが完備されており、一つのコミュニティとして機能が充実していることが挙げられる。さらに、新居住地区ならではの特徴として、ニュータウンへ越してきた一世の大半は当時20代後半から40代前半の子育て世代であったため、必然

的にニュータウン在住者の年齢分布に大きな偏りが見られる点も挙げられる。小学校でも上級生がいなかった時期から、仮設教室を設ける必要があるほど子供が集中した学年が現れた時期まであり、従来の地域社会における年齢分布とは明らかに大きな差が見られる。山を切り崩して建設されたニュータウンであるため、もともとの住民はおらず、当然ながらその地に根付いた方言も存在しない地であった。県内や東北各地をはじめ全国の他の土地から移り住んだ住民[1]で構成されているため、異なる方言の接触の場として捉えられる。

3. 調査方法

3.1 データの種類とサンプリング

本稿で扱うデータは大きく二つから構成される。まず、一つ目は産出（production）のデータで、話者より「自然発話」「文章の読み上げ」「単語の読み上げ」という三つの異なる手法で発話を収集したものである。二つ目は認識（perception）のデータで、ガ行子音の変異に関するインタビューと、同一話者による破裂音と鼻音を使用した発話音声に対する質問に答えるというタスク（Schilling 2013a の“matched guise”の手法を参照した）で得られたデータとなっている。分析の対象とするデータは筆者が 2010 年、2015 年と 2016 年に現地調査で収集したものである。

本稿では、一世は成人以降にニュータウンに移り住んだ人を、二世はニュータウン生まれ、または幼少期に当該地区へ移住し言語形成期をニュータウンで過ごした人を指す。当該ニュータウンにおける一世の出身地は様々であるので、そのことを考慮し、できる限り出身地の異なる一世を調査対象者に含めた。三つのデータにおける調査協力者は大方が同一であるが、全員が全ての調査に参加したわけではない[2]。被調査者の人数は以下の通りである。産出データは、一世（54 歳～68 歳）と二世（13 歳～28 歳）から男女 7 人ずつ、合計 28 人から収集した。認識タスク調査の被験者は、一世 19 人（男性 9 人・女性 10 人）、二世 14 人（男性 4 人・女性 10 人）の合計 33 人であった。最後に、インタビューでは一世 19 人（男性 9 人・女性 10 人）、二世 15 人（男性 7 人・女性 8 人）の合計 34 人より回答を得た。

3.2 産出（Production）データ

発話データは実際の言語使用を確認する上で重要なデータである。さらに今回は「自然発話」「文章の読み上げ」「単語の読み上げ」という三つの手法で得られたデータを比較することによって、異なるスタイルの発話においてガ行子音の現れ方に違いがあるかどうかを調べた。スタイルによる変異形の使われ方の違いは、「発話意識モデル」（Labov 1972）を援用し、話者の規範意識と関連付けて解釈することができる。つまり、話者の意識が発話に向くスタイルであるほど、より注意を払った・標準的な変異形が使われる

傾向にあると解釈される（Schilling 2013b）。三つのスタイルにおけるデータ収集方法は以下の通りである。まず自然発話は、普段から親しく交流のある 2 名の話者間の会話を録音したもので（以下「会話（スタイル）」）、今回は各会話から 30 分間を分析対象とする。文章の読み上げ[3]（以下「文章（スタイル）」）は、単語内にガ行子音を含む文章を読み上げてもらったものである。単語の読み上げ[4]（以下「単語（スタイル）」）は、ガ行子音を含む単語の単独及び単語の後に助詞の「が」を伴った形で読み上げてもらったものである。文章と単語データの作成に際しては異なる語彙層（和語・漢語・外来語）から、直前の音韻環境（5 母音・撥音）の異なる単語が含まれるように設定した。分析対象となるガ行子音の総トークン数は会話スタイルで 2,556、文章スタイルで 1,316（1 人 47 トークン）、単語スタイルで 1,876（1 人 67 トークン）であった。以下の分析で使用するデータは、ガ行子音の変異が現れうる全ての環境にあるトークンのうち、鼻音で実現された回数と割合を表したものである[5]。

3.3 認識（Perception）データ

認識タスクは、被験者に使用される変異形が異なる発話の録音を聞かせ、その各音声に対する質問に答えてもらうという形式で行った。このタスクは、話者にガ行子音の変異に対する意識を直接質問するのではなく、異なる変異形を使用した音声に対する意識を尋ねることによって、被験者たちが変異形に対し無意識に抱く印象、意見や評価を引き出すことを目的としている。使用した音声は 2 種類あり、一方はガ行子音を破裂音で発音した発話（以下「破裂音音声」）で、もう一方は鼻音で発音した発話（以下「鼻音音声」）である。二つの音声は各 1 分程度で、同一話者・同一内容となっており、できるだけガ行子音の発音だけが異なる音声の対比を試みた[6]。タスクではこれらの音声を聞いた後、それぞれに対して、以下の①から⑧の質問（①「きついと思う」、②「やわらかいと思う」、③「正しいと思う」、④「なまっていると思う」、⑤「標準語だと思う」、⑥「方言だと思う」、⑦「都会の話者だと思う」、⑧「当該ニュータウンの話者だと思う」）に対し 4 段階尺度[7]（例：a. 非常にきつい, b. きつい, c. あまりきつくない, d. 全くきつくない）で回答を得た。

またインタビュー調査では、被験者たちがガ行子音の鼻音と破裂音それぞれの変異形に対してどのような意識や評価を持っているのか、直接質問をした。調査は対面または電話を通じたインタビューで、以下の質問に対する回答を得た。① 鼻音と破裂音の変異形の発音の違いを意識しているか、② 鼻音を用いた話し方は「正しい」と思うか、③ 鼻音を用いた話し方は「田舎っぽい」と思うか、④ 鼻音を用いた話し方にどのようなイメージを持つか、⑤ 破裂音を用いた話し方にどのようなイメージを持つか。①から③は「はい」か「いいえ」で回答する質問で、④と⑤は自由回答形式である。鼻音と破裂音がどのような音か被験者に伝える際には、「鏡」や「長靴」などの単語を用いて、実際に

調査者が発音し分けて聞かせたほかに、鼻音に関しては「鼻にかかった音」という説明を加えた。このデータからは、当該コミュニティの被験者たちがガ行子音の変異形に対して意識的に抱く印象、意見や評価を引き出すことができる。

4. 結果と考察

4.1 産出データの結果

4.1.1 言語学的要因とスタイル

はじめに、発話データの結果から、先行研究で指摘されてきた言語学的要因の影響をスタイルごとに概観する。

まず、会話スタイルにおける言語学的要因の影響は以下の通りであった。①前の音が撥音である場合、前が母音である場合と比較して顕著に鼻音の割合が高い。②前の母音は中母音・低母音・高母音の順に鼻音率が高い。③語彙層は和語が漢語よりもやや鼻音になる率が高い。外来語は和語と漢語よりも鼻音率が高い結果となったものの、トークン数が少なかったためデータの信頼性が低い。④格助詞の場合は、格助詞以外のトークンと比較して鼻音率が高い。⑤連濁の影響に関しては、連濁によってカ行子音が有声化した場合はやや鼻音の割合が低い。また、⑥語・形態素境界の直後にガ行子音が来る場合は、境界に接していない場合と比較してやや鼻音になりやすい結果となった。従って、要因⑤と⑥は先行研究と一致しなかったが、①から④の要因に関しては先行研究の結果と一致した。

次に、文章スタイルにおける言語学的要因の影響は以下の通りであった。会話同様、①前の音が撥音である場合に鼻音の割合が高い。②前の母音は高母音・低母音・中母音の順に鼻音率が高く、会話とは逆の傾向であった。③語彙層は和語・漢語・外来語の順に鼻音率が高い。④格助詞の場合、鼻音率が高い。⑤連濁によってカ行子音が有声化した場合は鼻音の割合がやや高い。⑥語・形態素境界の直後にガ行子音が来るかどうかは、鼻音率にほとんど影響を与えない。従って、要因①、③、④、⑤に関して先行研究の報告と一致した。

単語スタイルにおける言語学的要因の影響は、直前の音韻環境（①撥音と②母音の高さ)、③語彙層、④格助詞の影響において、文章スタイルと同様の傾向を見せた。⑤連濁と⑥語・形態素境界の直後にガ行子音が来るか否かの影響は会話スタイルと同様の傾向となった。つまり、要因①から④の結果が先行研究と一致した。

以上、全てのスタイルに共通する三つの傾向が明らかにされた。a) 直前が撥音である場合に/g/は鼻音になりやすい、b) 語彙層が和語である場合、漢語である場合と比較して鼻音になりやすい、c) /g/が格助詞「ガ」に用いられる場合に鼻音になりやすい（言語学的要因の影響に関する詳細は奥村 2011 を参照されたい)。

4.1.2 世代差、スタイルと親の出身地

発話データ中に現れた、ガ行子音の変異の起こりうる箇所の中で、鼻音で発音された割合を世代別、またスタイル別に表すと図 1 のようになる。まず注目すべき点は、当該コミュニティにおけるガ行子音の変異には世代による違いが明確に現れているということである。鼻音で発音された割合を一世と二世で比較すると、会話、文章、単語の全てのスタイルにおいて、一世の方が二世よりも高い割合を示している。この世代差は統計的にも有意な差であった[8]。この世代差から、当該コミュニティにおいてある程度使用されていた鼻音が破裂音に取って代わられるという変化が起きていることが示唆される。また、ニュータウンであるという調査地の特性と結果に現れた世代差を踏まえると、海外のニュータウン研究（Kerswill & Williams 2002, Kerswill 2013）で述べられているフォーカシング、つまり接触環境で言語獲得をした世代において一つの変異形へ使用が集中していくという特徴が、当該ニュータウンでも生じていると考えられる。フォーカシングが生じていると考える根拠として、一世と比較して二世の破裂音の使用が圧倒的に高いというだけでなく、話者間のばらつきが二世で格段に小さくなっていることも挙げられる（図 1 の標準偏差を参照）。

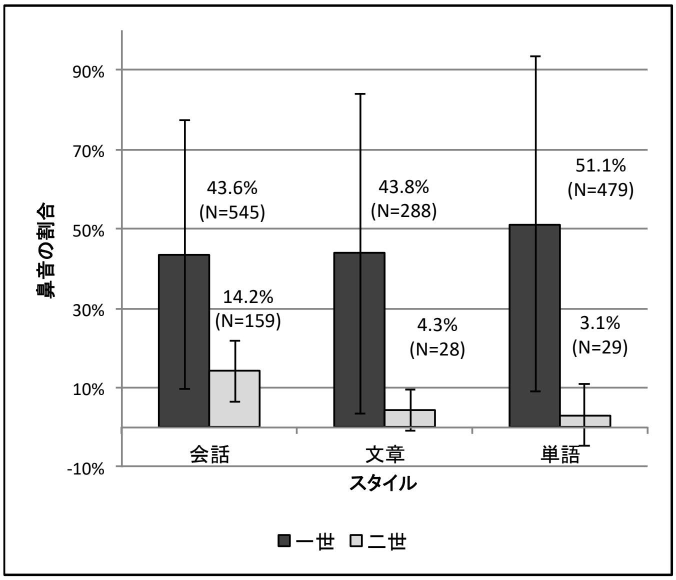

図 1. 各スタイルにおける一世と二世の鼻音の割合

ここで、二世は鼻音の使用が少なく破裂音の使用が圧倒的であるという傾向は、二世の親の言語使用に影響を受けた結果であるという可能性も考えられる。つまり、今回の調査協力者である二世の親たちの多くが非鼻音使用地域の出身者で、その影響があったのではないかという疑問についても検証する必要がある。そこで、二世を以下のように

親の出身地の方言で使われる変異形によって分類し、鼻音の使用率を比較してみた。その際、全国方言分布調査（FPJD）（国立国語研究所 2017）の「鏡」の項目を参照し、両親の出身県で鼻音と破裂音のどちらが優勢に使われているかを基準にした。すると、両親とも鼻音が優勢に使われる県出身者である 11 人（表 1 の上段）と、片方の親が鼻音優勢の県出身でもう片方が破裂音優勢の県出身である話者 3 人（表 1 の下段）の間には、大きな違いが見られないことが分かった。また、そのグループ間の差は統計的検定の結果からも有意ではないことが明らかとなった[9]。よって、今回の分析では二世は親の出身地方言に関わらず、圧倒的に破裂音を使用するということが分かった。

表 1. 親の出身地で優勢な変異形別にみた二世の鼻音の割合（スタイル別）

親の出身地における優勢な変異形	人数	会話	文章	単語	合計
鼻音	11	14.8% (N = 216)	4.3% (N = 22)	3.9% (N = 29)	8.2% (N = 177)
鼻音・破裂音	3	12.1% (N = 33)	4.3% (N =6)	0% (N = 0)	6.4% (N = 39)

4.1.3 接触の度合いと変化の速度

ここで、接触が及ぼす変化の速度への影響を検証するため、仙台の中心部の生え抜き話者を対象とした研究（大橋 2000）と比較を行う。大橋（2000）との比較を可能にするため、ここでは単一語の読み上げに現れたガ行子音のトークン（大橋 2000 における「単一語」と本調査の単語スタイルにおける単一語）に絞って考察を行う。表 2 は話者の生年を揃えて鼻音変異形の使用率を比較した結果である。大橋（2000）の高年層（60 代以上）と同年代の話者は本調査の被験者にはおらず、本調査には大橋（2000）よりも若い話者も含まれているため、同年代として比較するのは、生年が 1939 年～1958 年、1959 年～1978 年、1980 年～1983 年の三つの年齢層となる。その結果、同年代話者であっても、仙台生え抜き話者よりも本調査の話者の方が鼻音使用率が低いことが分かる。さらに、本調査の 13-25 歳の話者は全く鼻音を使用していないことから、当該コミュニティにおいて破裂音への変化が急速に進んでいることが分かる。

表 2. 大橋 (2000)と本調査における単一語の鼻音使用率

話者の生年		1939 以前	1939-1958	1959-1978	1980-1983	1985-1997
大橋 (2000)	調査時の年齢	60 歳以上 (高年層)	40・50 代 (中年層)	20・30 代 (若年層)	15-18 歳 (少年層)	
	鼻音%	99%	96%	51%	44%	
本調査 (2011)	調査時の年齢		54-58 歳 (一世 12 人)	43, 46 歳 (一世 2 人)	28 歳 (二世 2 人)	13-25 歳 (二世 12 人)
	鼻音%		47.9%	41.7%	12.5%	0%

ここで、本調査地における変化の速さはニュータウンの特徴に起因するという仮説を提唱する。Trudgill（2011: 2-9）は、変化の速度が速い言語・方言と遅い言語・方言を比較した世界各地の事例から、変化の速い言語・方言は接触のレベルが高い場所で使われていることを示した。これは井上（1968）が全国の鼻音から破裂音への変化の要因として、人口移動などによって起こる、異なる変異形を持つ方言の接触を早くに指摘したことに符合する。また、大橋（2001: 99）は仙台での変化が速いことに関して、「都市という社会的要因が作用している可能性」を指摘し、「都市であることの社会言語学的意味やその内実」を探ることが今後の課題であるとしているが、これも同様に接触の度合いの高さが関わっていると考えられる。従って、他の東北の調査地点よりも大きな都市であり接触度合いが高い仙台中心部での破裂音への変化がより進んでおり、出身地の異なる住民から構成された仙台市郊外のニュータウンではさらに接触の度合いが高く、仙台市中心部よりもさらに速い速度で変化を取り入れていると解釈することができる。

4.1.4 スタイルと規範意識

次に、異なるスタイルによって鼻音の使用率に差があることを示し、さらにその差の傾向が世代によって異なるという点について考察を加える。各スタイルにおける鼻音の使用率を比較すると、一世と二世では対照的な傾向がみられることが分かる。一世では会話（43.6%）・文章（43.8%）・単語（51.1%）の順に使用率が高く、二世はその傾向とは逆で、会話（14.2%）・文章（4.3%）・単語（3.1%）の順で使用率が低くなることが分かる（図 1 を参照）。「スタイル」の議論は現在様々な観点から行われているが、はじめに提言されたのが「発話意識モデル」（Labov 1972）である。このモデルによると、スタイルによる差は、話者が発話に向ける注意の度合いに関係しており、話者がより意識を向けない発話でよりカジュアル・非標準的な変異形が使われ、より意識を向ける発話では注意を払った・標準的な変異形が使われる傾向にあると解釈される（Schilling 2013b: 330）。Hibiya（1988: 100, 106）では単語リスト・文章読み上げ・インタビュー・くだけた発話の順に破裂音の発音になりやすいことが示されており、注意が発話に向くほどに破裂音が多く使われることを明らかにし、鼻音は日常語の変異形で、破裂音は社会ステイタスの高い変異形だと捉えている。本調査の結果では、会話・文章・単語の順に発話に向ける注意が大きくなると考えると、一世にとっては鼻音が、二世にとっては破裂音が、注意を払った・標準的な変異形だと仮定できる（詳しくは次章以降で考察する）。Hibiya（1988）の傾向と本調査の二世の傾向は類似しており、これは東京で起こった鼻音から破裂音への変化が、仙台の当該コミュニティでは東京よりも遅れて起こっていることを表す一つのデータであるとも捉えられる。

4.2 認識データの結果

4.2.1 インタビュー調査の結果

前節で見たように、スタイルに関わる鼻音の使用の傾向が世代によって異なることから、ガ行子音の鼻音変異形の社会的意味が、世代によって異なるのではないかという疑問が生じる。ここで、ある特定の変異形が持つ社会的意味というものが、必ずしもコミュニティ内の全てのメンバーによって共有されるものではないということを示した先行研究を参照する。Matsumoto & Britain（2003）の多言語社会パラオの日系人コミュニティにおける調査では、日系パラオ人女性の高齢層と若年層では、同じ日本語という言語に対して異なる社会的意味を付与していることが明らかとなった。このようなパターンは、長期間の参与観察により得られたエスノグラフィーから話者の背景や言語生活を精査したことによって解明された。当該コミュニティの場合にも、発話データの結果の考察より、世代によって鼻音変異形の持つ社会的意味が異なる可能性が現れてきた。鼻音変異形が複数の社会的意味を持ち得ることは背景の章で述べた通りで、その中でも一世は鼻音に対して規範的だという社会的意味を関連付けると考えられるのに対して、二世はそのような傾向はないと考えられる。

一世と二世が同じ変異形に異なる社会的意味を付与するという仮定は、インタビューの結果からも支持される。まず質問①から③（以下参照）の「はい」か「いいえ」の二択で回答する質問の結果（表 3）を、次に鼻音と破裂音の変異形それぞれに対するイメージについての自由回答の結果（表 4）を考察する。質問①の「鼻音・破裂音それぞれを用いた話し方の違いを意識しているか」という質問に対しては、一世・二世ともに多数派の回答が「意識していない」であった。しかし、一世の 3 割以上が「意識する」と回答したのに対し、二世では 1 人を残し全員が「意識しない」と回答した。従って、ガ行子音の変異はどちらの世代の話者にも意識されていない傾向にあるが、その度合は二世で顕著だということが分かる。質問②の「鼻音を用いた話し方は『正しい』と思うか」に対しても世代間で差がみられた。一世のほぼ半数が「思う」と回答した一方、二世のほとんどが「思わない」と回答している。よって、一世である程度の割合で現れている「正しい」という意識は二世では激減し、二世の間では意識的に鼻音が正しいとは認識されていない傾向にあることが分かった。質問③「鼻音を用いた話し方は『田舎っぽい』と思うか」という質問に対しては、質問①と②の回答と異なり、一世と二世で全く違った傾向が現れた。一世はほとんどが「思わない」という回答だった一方、二世で逆のパターンが現れた。つまり、一世の 8 割近くが「『田舎っぽい』と思わない」と回答したが、二世の 8 割が「思う」という回答であった。この結果から、鼻音に対して「田舎っぽい」というイメージを持つかどうかには大きな世代差があり、当該ニュータウンの二世の話者が鼻音を使った話し方を「田舎っぽい」と感じる傾向にあることが分かった。なお、質問①から③への回答における世代差は統計的に有意であることも確認された[10]。

表 3. 世代別にみた質問①～③のへ回答

	①鼻音と破裂音の変異形を用いた話し方の違いを意識しているか		②鼻音を用いた話し方は「正しい」と思うか		③鼻音を用いた話し方は「田舎っぽい」と思うか	
	している	していない	はい	いいえ	はい	いいえ
一世	7 人 (36.8%)	12 人 (63.2%)	9 人 (47.4%)	10 人 (42.6%)	4 人 (21.1%)	15 人 (78.9%)
二世	1 人 (6.7%)	14 人 (93.3%)	2 人 (13.3%)	13 人 (86.7%)	12 人 (80%)	3 人 (20%)

上記の質問①から③への回答は、鼻音と破裂音の変異形それぞれに対するイメージについての自由回答からも裏付けられた。下の表 4 は鼻音の「田舎」性、破裂音の「都会」性、また被験者がイメージする変異形使用者の推定世代に関連する自由回答を挙げたものである。まず、「田舎」や「都会」に関連する回答に注目すると、鼻音に対して「田舎」や「なまっている」というような回答は二世からのみ得られ、一世からはそのような回答はなかった。一方、破裂音に関しては、一世・二世ともに「都会」や東京などの「都市」で話されているという回答が現れた。つまり、どちらの世代も破裂音と「都会」性に関連があると意識的に認識しており、二世に限って鼻音と「田舎」性に関連があると意識的に認識されている。また、それぞれの変異形を使用する話者に関しては、一世からは「自分たちの世代は鼻音を使用する」や「若い人が破裂音を使用する」という回答があり、二世からは「鼻音は高齢者が使用する」という回答が複数あった。ここから、被験者たちが変異形使用者の推定世代を、ある程度意識的に認識していることが分かる。さらに、破裂音に対して一世の持つイメージには他に「公的な感じ」や「はっきりしている」という回答がある一方、「威圧的だ」「違和感がある」等、否定的ともとれる回答もあり、日本各地から移り住むことになった当該コミュニティの一世の持つ変異形への評価には幅があることが窺える。しかし、二世の破裂音への評価には否定的なものがほとんど見られないことから、ここにも両世代の認識に差があることが分かる。

表 4. 鼻音の「田舎」性、破裂音の「都会」性、被験者がイメージする変異形使用者の推定世代関連する自由回答（カッコ内は回答人数）

回答の種類	回答者	鼻音	破裂音
「田舎」性・「都会」性	一世	なし	都会の話し方(3)／東京／京都や大阪で顕著
	二世	なまっている(2)／方言によく出る／仙台のはずれの方の話し方／加美郡の話し方／都会の人は使わない／いなか	関東の発音／都会的／なまりがない人の発音
変異形使用者の推定世代	一世	自分の年代の人は身についている音	若い人の話し方
	二世	高齢者の発音(6)	なし

このインタビューの結果を概観して以下のような傾向が見えてきた。二つの変異形の違いを「意識しない」という人が多数である一方、各変異形に対して「正しさ」や「田舎っぽさ」という評価を持つと回答した人がおり、さらに自由回答でその他の意見や評価を持つと回答した人も少なからずいた。そこから、実際に当該コミュニティの話者たちは発話の中で使われる変異形の違いを聞き分けられているのかという疑問が生じる。次章では、その疑問を解明する試みとして、異なる変異形の使用された発話を聞かせ、その発話への認識を調べるタスクを行った結果を示し考察する。

4.2.2 認識タスクの結果

本節では認識タスクの結果に基づき、当該ニュータウンの話者たちが無意識下においてガ行子音の変異形をどのように捉えているのかを考察する。このタスクでは異なる変異形を使った二つの音声、「破裂音音声」と「鼻音音声」を聞いて、回答者が各音声がどの程度①「きつい」、②「やわらかい」、③「正しい」、④「なまっている」、⑤「標準語だ」、⑥「方言だ」、⑦「都会の話者だ」、⑧「ニュータウンの話者だ」と思うかを4段階尺度で回答を得た。

「破裂音音声」と「鼻音音声」それぞれに対する質問①から⑧への回答を比較すると、一世の質問①と質問②への回答において有意な差が出た以外は、他の質問対する回答には統計的に有意な差は現れなかった。つまり、一世の回答では「鼻音音声」よりも「破裂音音声」の方が「きつく」、「破裂音音声」よりも「鼻音音声」の方が「やわらかい」と思うという差[11]が現れたが、二世の回答からは同様の有意差は見られなかった。また、一世・二世ともに、③から⑧までの質問に対する回答では、発話に使われた変異形の違いによって被験者が持つ認識に有意な差は出なかった。よって、一世・二世ともに、発話内で使用される変異形が鼻音か破裂音かという違いのみでは、発話から受ける印象や発話に抱く評価に差が生じにくいということが分かった。

4.2.3 インタビューと認識タスクの比較

ここで、認識タスクの結果と前節のインタビュー調査の結果を比較考察する。まず、認識タスクの結果とインタビュー調査の質問①「鼻音・破裂音それぞれを用いた話し方の違いを意識しているか」への回答結果を対照してみると、二つの結果は同様の傾向見せた。インタビューの質問①への回答からは、一世・二世ともに変異形の違いを「意識しない」という回答が多数派であるものの、「意識する」と回答した人数は二世よりも一世に多いという結果が得られた。また、認識タスクにおいては一世が「破裂音音声」と「鼻音音声」の間に「やわらかさ」と「きつさ」という点で違いを認識しているという差以外は、一世・二世ともに二つの異なる変異形を使った発話音声の間に認識における差は見られなかった。つまり、インタビュー調査と認識タスク双方の結果から、一世も二

世も多くの場合変異形の違いを認識していないものの、違いを認識している話者も少数ながら存在し、そのような話者は二世ではなく一世であるという傾向が見られた。

しかしながら、インタビューの質問②と③の回答と認識タスクを比較してみると、両者の結果には相違が見られた。インタビューの質問②と③の回答からは、鼻音変異形が「田舎」性と関連する、破裂音が「都会」性や「正しさ」と関連するという認識が明らかになった。一方で、認識タスクの質問③「正しい」、④「なまっている」、⑤「標準語だ」、⑥「方言だ」、⑦「都会の話者だ」に対する回答からは、発話に使われた変異形の違いによって被験者が持つ認識に差は出なかった。インタビューと認識タスクの回答における違いは、前者の場合は話者が意識的に持つ評価であり、後者の場合は話者の無意識下での評価であることにある。従って、鼻音の持つ「田舎」性や破裂音の持つ「都会」性や「正しさ」といった評価は、ガ行子音の変異形を取り立てて意見を述べる際には認識されるものの、日常の言語使用においては変異形の差は認識されにくく、必ずしも各変異形に対して際立った社会的意味や評価は関連付けられていないと解釈できる。

5. 結論

本稿では、これまで研究の少なかった日本におけるニュータウンに焦点を当て、ガ行子音の変化に関わる諸要因を明らかにし、さらに世代の異なる話者が各変異形に抱いている社会的意味の解明を試みた。また調査方法も、これまで広く扱われて来なかった、産出データと認識データを組み合わせた手法を取り入れることで、被験者の言語使用に加えて被験者が変異形に対して意識的、また無意識に抱く印象や評価を引き出すことができた。日本の地域方言研究においては、高齢層から伝統的で「純粋な」方言を収集することが重要視されてきた。しかしながら、現代の社会では人口の流動性の高い地域が増えており、異なる方言が接触する機会も増している。よって、今後はニュータウンのような、人口の流動性の高い地域での言語研究の必要性も高まるであろう。

また、本稿は海外で行われてきたニュータウンにおける研究や方言接触に関する研究との共通点をも見出すことができた。社会言語学の分野においては、世界の様々な地域で異なる変種間（言語間・方言間を含む）の接触が調査され、共通する変化のプロセスが見られることが報告されている（Trudgill 1986, Kerswill & Williams 2002, Kerswill 2013）。その一つが、本調査のニュータウン二世話者の発話にも見られたフォーカシングである。さらに、言語変化の速さと接触の度合いを関連させて論じた点において、日本国内（井上 1968, 本稿）と、海外の社会言語学的研究（Trudgill 2011）との共通性を見出すことができた。今後はさらに被験者数を増やし、研究の精度を高めていきたいと考えている。

註

[1] ニュータウンへ移住した一世の出身地をまとめた公式な統計は存在しないが、本調査に関わった被験者約 50 名から一世の出身地を調査したところ、仙台や東北各地の出身者が約 6 割、関東と関西の出身者がそれぞれ約 1 割、その他、北海道、北陸、中国、九州出身者は極少数であった。

[2] 今回、発話録音調査からインタビュー調査・認識タスクを行うまでに時間が空いてしまったため、発話調査に参加した話者全員からインタビューとタスクへの協力を得られなかった。

[3] 「文章の読み上げ」に使用した文章は、一文に分析対象となるガ行子音のトークンを複数含めるように作成した。以下は使用した文章のうちの一文である（分析対象に下線を付けて示す)。「祖父母の家は田舎にあり、<u>家具</u>も<u>窓ガラス</u>も古びて、<u>鍵</u>は壊れかけていた<u>が</u>、軒には<u>甘柿が</u>干してあり、庭には<u>野菊</u>がきれいに咲いていた。」

[4] 「単語の読み上げ」に使用された単語の例は以下の通りである。和語は「鏡」「眺める」など、漢語は「科学」「地方銀行」など、外来語は「ヨーグルト」「マガジン」など。

[5] 鼻音以外のトークンは、摩擦音[ɣ]で発音された少数を除いてほぼ全てが破裂音である。

[6] 今回の調査で用いた音声は、コンピュータ処理を用いてガ行子音のみが異なるように操作して作成したわけではないため、厳密に言えば抑揚やスピードなど、全く同じというわけではない。しかし、調査協力者のメタコメントとして、二つの音声の違いが分からなかったという意見も多く聞かれたため、ある程度の比較可能性が確保できたと考える。

[7] 4 段階の尺度の他に、「不明」という選択肢も用意し、回答者の判断がつかない場合にも対応できるようにした。

[8] マン・ホイットニーの U 検定の結果より、会話で $U = 48.000$、$N1 = 14$、$N2 = 14$、$p = .021$（両側)。文章で $U = 54.500$、$N1 = 14$、$N2 = 14$、$p = .044$（両側)。単語で $U = 26.500$、$N1 = 14$、$N2 = 14$、$p = .001$（両側)。

[9] マン・ホイットニーの U 検定の結果より、会話で $U = 12.000$、$N1 = 11$、$N2 = 3$、$p = .555$（両側)。文章で $U = 9.000$、$N1 = 11$、$N2 = 3$、$p = .291$（両側)。単語で $U = 12.000$、$N1 = 11$、$N2 = 3$、$p = .555$ （両側)。

[10] Fisher's exact test を使用した結果、質問①への回答は $p = .0529$（両側)、質問②への回答は $p = .0640$ （両側)、質問③への回答は $p = .0014$（両側）であった（質問①と②は 10%水準、③は 5%水準で有意)。

[11] 符号検定の結果、どの程度「きつい」と思うかという質問に対する回答では $p = .016$、どの程度「やわらかい」と思うかという質問に対する回答では $p = .002$ で有意であった。

参考文献

朝日祥之 (2008).『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房.

井上史雄 (1968).「ガ行子音の変化とその要因」『日本方言研究会第 6 回発表原稿集』, 38-47.

大橋純一 (2000).「ガ行鼻音」小林隆（編）『宮城県仙台市方言の研究』, 8-19. 東北大学国語学研究室.

大橋純一 (2001).「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文藝研究』151, 106-97.

奥村晶子 (2011).「ガ行子音のバリエーション―仙台市・泉パークタウンにおける社会言語学的調査―」修士論文, 東京大学大学院総合文化研究科.

金田一春彦 (1942).「ガ行鼻音論」（金田一春彦 (1967). 『日本語音韻の研究』東京堂出版に再録, 168-197）.

国立国語研究所 (1966).『日本言語地図第一集』大蔵省印刷局.

国立国語研究所 (2017).「全国方言分布調査（FPJD）」 http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index. html（2017 年 7 月 11 日閲覧）.

小林隆 (2000).「研究の概要」小林隆（編）『宮城県仙台市方言の研究』, 1-6. 東北大学国語学研究室.

永田高志 (1987).「東京におけるガ行鼻濁音の消失」『言語生活』430, 66-72.

南部智史・朝日祥之・相澤正夫 (2014).「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について―札幌と富良野の言語調査データを利用して―」『国立国語研究所論集』7, 167-185.

Hibiya, Junko (1988). A quantitative study of Tokyo Japanese. Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania.

Hibiya, Junko (1995). The velar nasal in Tokyo Japanese: A case of diffusion from above. *Language Variation and Change,* 7, 139-152.

Kerswill, Paul (2013). Koineization. In Chambers, J. K. & Schilling, Natalie (Eds.), *The Handbook of Language Variation and Change* (2nd edn.), 519-536. Chichester: Wiley-Blackwell.

Kerswill, Paul & Williams, Ann (2002). Dialect recognition and speech community focusing in new and old towns in England: The effects of dialect levelling, demography and social networks. In Daniel Long & Dennis Preston (Eds.) *A Handbook of Perceptual Dialectology*, vol. 2. Amsterdam: Benjamins. 173-204.

Labov, William (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia PA: University of Pennsylvania Press.

Matsumoto, Kazuko & Britain, David (2003). Investigating the sociolinguistic gender paradox in a multilingual community: A case study from the Republic of Palau. *The International Journal of Bilingualism*, 7(2), 127-152.

Schilling, Natalie (2013a). *Sociolinguistic Fieldwork*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schilling, Natalie (2013b). Investigating Stylistic Variation. In Chambers, J. K. & Schilling, Natalie (Eds.), *The Handbook of Language Variation and Change* (2nd edn.), 327-349. Chichester: Wiley-Blackwell.

Trudgill, Peter (1986). *Dialects in Contact*. Oxford: Basil Blackwell.

Trudgill, Peter (2011). *Sociolinguistic Typology: Social Determinants of Linguistic Complexity*. Oxford: Oxford University Press.

謝辞

本研究を進めるに当たっては、多くの方々からのご指導・ご協力を得たことを、この場を借りて深謝申し上げる。指導教員である松本和子先生には、調査の段階から論文執筆に至るまで細やかなご指導を頂いた。また、修士論文副査の野村剛史先生には、本稿執筆につながる認識データの重要性をご指摘いただいた。最後に、本調査にご参加いただいた調査協力者の皆様、また調査を進める上でご協力いただいたニュータウン住民の方々に御礼を申し上げる。